

令和5年度第1回おおさかプラスチック対策推進プラットフォーム会議

議事概要

日 時：令和5年9月19日（火）15:00～17:00

場 所：咲洲庁舎 41 階会議室5（オンライン併用）

出席者：出席者名簿のとおり

1 分科会の取組みについて

○事務局が、両分科会の取組状況（資料1-1）を説明。地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所が、令和5年度プラスチック被覆肥料殻の流出実態把握及び流出対策設備の効果検証（資料1-2）の結果を説明。

【主なやり取り】

（花田議長）施肥における代替技術の実用化の進捗状況、現在のプラスチック使用のものとの価格差はどれくらいか。

（環農水研）浅水代かきは農家独自の田植えの流儀があるため普及状況は不明、回収ネットの使用は排水施設設備の構造が農家によりさまざまで、ネットの詰まりの除去等のメンテナンスがあるため普及できていないかは不明。また、プラスチック不使用の肥料の使用は、中稲や晩稲の品種について収量が伸びないので、現在肥料メーカーにて検討中。流し込みについては肥料むらの発生のため推進できていない。

（花田議長）過去に使用された肥料に対しての対策も含めて、事務局からのプラスチック流出抑制防止策について啓発活動の推進等の施策をお願いしたい。

（原田准教授）JA 全農はプラスチック被覆肥料の全廃も将来的に考えているとの情報もある。肥料メーカーからは、次世代の肥料の形態や散布方法について、各研究機関から認証制度やガイドラインの作成要望がある。

（環農水研）新しい施肥方法では、現在のプラスチック被覆肥料と同様のまき方で側条施肥法も進められている。

（原田准教授）流通や小売り業界では、プラスチック被覆肥料を使用していないことが証明された米の購入を扱いたいとの意向があるようだ。

2 取組紹介

○万博に向けた資源循環に共にチャレンジ！ごみゼロ共創ネットワーク（資料2-1）の取組み状況を説明。神奈川県環境科学センターよりマイクロプラスチックに関する調査研究結果の概要（資料2-2）を説明。

【主なやり取り】

（原田准教授）海岸でのマイクロプラスチックの調査では、赤いプラスチックは確認されたか。私は、それがカラーコーン由来と考えているが、近畿の海岸ではよく見られるようになった。神奈川県での調査でも散見されたか。

（環境科学セ）神奈川県でもカラーコーンに由来する赤いプラスチックは散見される。住宅街での路上調査ではよく見られた。

- (原田准教授) 近年、入手しやすいため道路や工事現場等でカラーコーンが頻繁に使用されているが、屋外での使用や管理状態の悪さから、環境への流出が多くみられるようになったので注意喚起が必要。
- (花田議長) カラーコーンの適切な使用、廃棄、管理等の注意喚起が必要。
- (原田准教授) 廃棄カラーコーンの回収（行政所管のカラーコーンもある）やカラーコーンを用いたスケートボードの練習では、破片が予期せぬプラスチック流出になり啓発が必要。
- (事務局) マイクロプラスチックの調査で薬剤分離でなく、比重を用いた分離を用いた理由は何か。
- (環境科学セ) 海岸での調査は他の有機物による汚染が少ないので、薬剤での分離は必要ないため。
- (事務局) 肥料から排出されるプラスチックの対策については、流出対策設備を設置、管理するよりも、作業（代かきの手法等）を変更する方法の方が農家には簡易で受け入れられるか。
- (環境科学セ) 農家を直接指導する他の所管機関からの意見でも代かき手法等の変更ならば取組めるとのこと。
- (原田准教授) 試験前処理手法については標準化されていて、汚染やよごれの度合いで選択できる。また、自動前処理装置についても新たなものが試験機メーカーから出されている。プラスチックの粒径についても 0.5~0.3 mm では人間の目でも識別できるが、それ以下では機械が必要になる。簡易的には 1 mm 程度以上でも傾向はつかむことができる。
- (事務局) ビーズクッション由来のプラスチック流入経路を調査しているが、なかなか確認できない。ビーズクッション由来の球形形状のプラスチックについて、街中や海岸では確認できるが、河川では確認できない理由について心当たりはあるか。また、流出経路についてどのように考えているか。
- (事務局) それは、市町村が行うごみ処理施設への廃棄物輸送・一時保管時の流出か。
- (環境科学セ) ビーズクッション由来プラスチックは、粗大ごみで扱われる場合が多く、その形状や重さ故に輸送・一時保管時に破袋すると大量流出してしまい、一気に河川等へ排出され、大量に海岸に流れつく可能性がある。ただ、うまくそのタイミングで調査をしないとそれで流れ去ってしまえば、河川の調査を行う段階では少量しか確認できない場合がある。
- (事務局) 下水処理等の処理を超えて河川への流出している可能性がありそうか。
- (環境科学セ) 現在の実施している(ピンポイントの)ビーズクッション由来プラスチックの河川調査では、バラツキが大きいこともあり多く流出源の明確な確認ができない。

3 今後の対策検討の方向性について

○事務局がプラットフォームにおける今後の対策検討の方向性（案）について（資料2）を説明

4 その他

【主なやり取り】

(花田議長) プラットフォームでの情報共有や調査結果の議論は、新たな事業展開、市場創造、を含み各産業分野で広く活用し、色々な活動を行っている方々に有益なものとなっ

てほしい。本プラットフォームで議論した内容をもとに予算化し、事業展開し社会実装につなげていきたい。

(プラ工連) 2040年プラスチックゼロを目標とするなら、定点観測手法で、マイクロプラスチックを含めマクロプラスチックのデータをとれるような予算を確保して、数値をもとに議論してほしい。

(花田議長) 定点の具体的な位置(案)はあるか。

(プラ工連) 関東在住なので提案できないが、過去の測定点データも活用してマクロプラスチックを調査してほしい。2040年までには時間があるので検討してほしい。

(原田准教授) 淀川水系でイタセンパラの野生復帰の研究データがある守口市庭窪ワンド(サンプル調査)や、大阪公立大学の研究で和歌山県友ヶ島(大阪湾のごみの流れ着く場所)のデータの活用がよいのでは。

(花田議長) イタセンパラ関連では、環農水研の生物多様性センターの調査もある。今後はプラスチックだけの調査結果にこだわらず、様々な研究や社会システムを統合的に考えていきたい。

(熊取町) ビーズや被覆肥料等の使用については、消費者行動を啓発して被害状況の理解を得るように進めたほうが良い。そのためにはデータ収集や研究する必要があり、上手な予算化を行ってほしい。

(花田議長) “魚の重さよりごみの重さが上回る”、“生物の絶滅に外来種の関与が約6割関与するのは外来種”といった報道が話題となり、警告として認知されることになる。世間をにぎわしているが、地道なデータの蓄積が啓発につながる点でも調査研究には価値がある。

(事務局) 定点観測では、一昨年より大阪大学と協力して河川監視カメラを用い、プラスチックだけでなく流入ごみのAI解析を行う事業も行っていて、今後も継続していきたい。

5 会議終了後追加情報

(事務局) 大阪府では民間への補助事業として今年度、“令和5年度 脱炭素・海洋プラスチック対策先進技術導入モデル事業の公募について”を公募しております。受付期間は第3次で令和5年9月15日から10月16日で、海洋プラスチック対策先進技術分野を対象としております。内容をHP確認の後、ご興味がありましたら事務局より説明もしますのでご連絡ください。

次回開催 全体会議 令和6年3月頃

<略称>

環農水研 地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所

環境科学セ 神奈川県環境科学センター

プラ工連 日本プラスチック工業連盟